

西アフリカにあるセネガルという国をご存じだろうか。ダカール・ラリーのかつての終着点はセネガルの首都ダカールだった。2018年のサッカーW杯ロシア大会で日本と対戦した国であり、プレミアリーグで活躍するサディオ・マネ選手の出身地だ。音楽好きには、グラミー賞受賞者で、2017年に高松宮殿下記念世界文化賞を受賞したユッス・ンドゥールが有名だろうか。

セネガル共和国はアフリカ大陸の最西端に位置し、

真夜中のダンスパーティー

語であるが、主要民族であるウォロフの人々の言葉が首都を中心に広く使われている。

私の専門は文化人類学であり、セネガルの「伝統的」な踊りに関わる人々とその活動を追っている。セネガルでは、沿岸部の民族を中心に、サバルSabarと呼ばれる太鼓が演奏されている。アフリカの太鼓という、ジェンベを思い浮かべる方も多いかもしれないが、それとは異なる。

サバルは、利き手にバチを持ち、反対の素手と合わせて多彩な音を叩き出す太鼓で、ゲウエル(フランス語ではグリオ)と呼ばれる職能集団がその演奏の中心だ。命名式や結婚式などの人生儀礼、娯楽や学校行

ていたほど、音が良く通る。真夜中の屋外でその太鼓が十数台集まり、爆音で演奏される空間を想像できるだろうか。日本では考えられないことだろう。

出席者は美しく着飾り集い、踊りたくなれば太鼓隊の前に飛び出し、踊る。サバルは、踊り手が音を主導する珍しい踊りだ。踊り手が速く踊れば、太鼓隊が叩くリズムも速くなる。踊り手との掛け合いで、太鼓隊も次第に熱を帯びてくる。観客も歓声を上げる。真夜中の熱狂だ。2時間ほどの熱狂の後、突如として終了を告げるリズムが演奏され、それを合図に出席者は波が引くように一斉に帰路に就く。サバルの音だけが耳に残る。

日本では、騒音問題が何かと話題になる。昨年末も除夜の鐘がうるさいという苦情により、中止や時間帯の変更をおこなった寺院も多いと聞く。なんとも風情がないと個人的には思ってしまうが、時代と共に変化せざるを得ない部分もあるのだろうか。

失われる 音への寛容さ

淑

愛知淑徳大学
ビジネス学部
助教授
菅野



奴隸貿易の拠点となったゴレ島は世界遺産に登録されている。1960年に旧宗主国であるフランスから独立した。公用語はフランス

事、憂き晴らしの女子会など、さまざまな機会にサバルが演奏され、人々は踊る。週末ともなれば、街のあちこちで太鼓の音が聴こえる。セネガル初代大統領サンゴールが「我睡る、ゆえに我あり」と語ったほど、彼らの生活には欠かせないものだ。

演奏は、たいてい住宅街の路上を封鎖し、おこなわれる。時には午前0時を過ぎた時間帯から始まる場合もある。かつてサバルは、通信手段としても利用され

た。日本では、騒音問題が何かと話題になる。昨年末も除夜の鐘がうるさいという苦情により、中止や時間帯の変更をおこなった寺院も多いと聞く。なんとも風情がないと個人的には思ってしまうが、時代と共に変化せざるを得ない部分もあるのだろうか。

た。日本では、騒音問題が何かと話題になる。昨年末も除夜の鐘がうるさいという苦情により、中止や時間帯の変更をおこなった寺院も多いと聞く。なんとも風情がないと個人的には思ってしまうが、時代と共に変化せざるを得ない部分もあるのだろうか。

かんの・しゅく 文化人類学、アフリカ地域研究。名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1982年生まれ。